神金公民館だより

第１４９号
２０２２年
８月１日

神金地区納涼花火大会

8月22日(日)
19：30～ 小雨実施

実施場所
二本木線神戸バス停付近の高台

◎従来実施してきた神金地区納涼祭は，新型コロナウィルスの感染状況から判断し，今年も実施いたしません。
◎自宅付近の花火の見えるところで家庭ごとでお楽しみください。

神金トピックス＆ニュース

大きな振り子時計

神金小学校１階の階段脇にあるこの時計は，昭和初期に精工舎で製造された振り子時計です。

寄贈者は「矢崎博之」，寄贈月日は昭和２２年４月１日と記されています。

矢崎博之さんは，現在の下河原組出身で明治１５年に生まれ，陸軍少尉として日露戦争に参戦し殊勲を上げ，勲五等を受賞しています。大正１０年に，工兵少佐として第一次世界大戦中のヨーロッパ１１カ国に軍事視察を目的に派遣を命ぜられ，業務を遂行しています。

昭和４年に電信第一聯隊長に，昭和７年に陸軍少将に任用され，昭和３９年に亡くなられました。

長い間旧公民館にしまわれていたこの時計を，昨年度の校長先生が時計屋さんに修理を依頼し修復してくれ蘇りました。

この時計も７５年前から神金の移り変わりを見てきた，神金の歴史の生き証人の一つではないでしょうか。

今年も納涼祭は中止となります

毎年多くの方々に参加していただき，楽しいイベントの一つとなっていた納涼祭ですが，ここ２年間中止となったので，今年こそはという思いはありましたが，感染者が再び増えてきているような状況ではやむを得ません。ご理解をお願いいたします。

代替行事として，１ページ目の案内のように「納涼花火大会」を実施いたしますので，楽しんでいただきたいと願っています。

神金の歴史

地元の歴史研究家でもある故飯島卓郎氏が，神金小学校PTA会報「ふもと」に執筆し寄稿した「神金の歴史」をシリーズで紹介します。

令和になった今，神金で生きる者にとって，この地で生活した人々の足跡を鮮やかに蘇らせ，知恵や遺産・心意気を学び，心の大きな後ろ盾や糧になればと願います。

道　一

むかし、甲斐の国には他国に通ずる道路が九筋あった。その内、東山梨方面には雁坂口（国道甲府熊谷線）と萩原口の二筋であった。甲斐国史によると、萩原口は青梅通りとも大菩薩越えとも武州口ともある。起点は酒折とある。酒折から山崎の摩利支天社の前で御坂路（後鎌倉街道）と分かれ、鎮目、万力、差出の磯、神内川、八日市場から塩後、於曽、千野、粟生野、小田原筋から裂石まで、県道、青梅街道にだいたい沿って上り裂石にて右折し、雲峰寺を左に見て千石平より山路にかかり、大菩薩峠を越え、小菅、丹波を経て氷川、青梅を過ぎ、終点は新宿である。道のりは大体三十里と言われている。大昔、日本武尊が御東征の砌り、お通りになった道だと伝えられている。

平安時代の中期、甲斐源氏の祖、新羅三郎義光が奥州の賊徒征伐の折りに、鎌倉時代には日蓮上人が遊化の途中に、江戸時代には既に甲州街道が開通していたが、江戸歌舞伎の海老蔵・団十郎などの役者達が甲府に巡業の途中、郡内にて強請り騙りに懲りて人気の少ない道を避けて一座はこの道を通ったのである。

徳川家康が天下を掌握し江戸に幕府を移したため、江戸は政治・経済の中心になったので、元和二年（１６１６）江戸を中心に五つの街道をつくった。その中に甲州街道がある。それまでは笹子・小仏が難所のため日影の四寸路などと言い、狩人や山仕事をする人の外は僅かの旅人が通った程度であったが、約ニケ年の歳月を経て立派な街道が江戸まで完成した。それ以後は、萩原口は甲州裏街道と称し人の往来は少なくなったが、武州方面からの巡礼、甲府の善光寺への参詣大、塩山の湯への湯治客の外は人目を忍ぶもの、世を憚るものの道となったが、江戸幕府もこの道の重要性を認め、上小田原番屋部落に萩原口留番所を設け明治初年まで在った。萩原口の街道は、大菩薩越え八里と言われている。ここには大きな史実と幾多の寓話があったが、時の流れと共に忘れ去られようとしている。

（以上が甲斐の国の主要道路萩原口のあらましである。）

＊次ページに続く

神金の歴史

昔から、この道は国中から丹波、小菅への生活必需物資の輸送路であった。昔は神内川、小原辺りが宿場と称し物資の集散地であり経済の中心地であった。塩山は於曽と言い明治になって賑やかになったのである。国中から丹波まで人の足で充分往復できたが、物資はすべて馬の背で運搬したのであるが、馬が荷物をつけて八里の山路を往復することは困難のため、特殊の取引方法が考えられた。峠を東に約二十分程下った左側に「フルコンバ小屋」を設け、大正年間まで荷渡しの小屋として活用されていた。中里介山の小説「大菩薩峠」には妙見の社となっている。文中に「この社を市場として一種の奇妙な物々交換を行う」とある。机龍之介はこの社のうしろに身を隠し、巡礼の老人を胴体二つに切った所でもある。国中の産物、米味噌、醤油、酒等を妙見社まで届ける。妙見社には誰も人は居らぬが、問屋の約束によって荷物に荷札がついてあるのでそれを又馬の背につけて帰り問屋に届ける。峠向の荷物は木材、鈴竹、木炭等であった。

その様な取引がなされたが聊かの手違いもなく、天候の都合により十日余りもその儘にしてあっても物が無くなる気づかいはなかったそうである。思うに妙見菩薩の加護の賜であろう。妙見様は現在も嶺に祀られている。馬の背で荷物を運搬する仕事を「駄賃付け」と言い、当時としては良い稼ぎになった様である。文化年間（１８１０）神金、上萩原上下、小田原上下に約６０頭の馬を飼っていたが。大半は駄賃つけで働いていたようである。明治十一年青梅街道の開通によって、数百年にわたる妙味の社にての商取引は途絶えたが、全国的にも珍しく特筆すべきものである。大菩薩越えの山路に百体の観音仏が祀られていたことを知る人は少ない。弘化三年（１８６４）萩原と小田原の人達が願主となって、近在近郷から浄財を集め、大菩薩越えの険路を上り下りする旅人が荷物を背に運ぶ馬の安全や保護を仏に祈り、願いを込めて祭ったのである。千石平のお地蔵山を起点とし妙味の社まで山路の左側に大体等しい間をおいて鎮座していたのである。

この観音さんには番号と寄進者の名前と村名が刻まれており、下から番号順になっていたので、山崩れや不心得者のいたずらによる亡失はすぐ判ったので補充はすぐになされた様である。苗字のあるものは明治年間のものである。青梅街道の開通によりこの道を通る旅人も馬も殆どなくなり、従って尊い石仏も草や砂に埋もれ、或いは山崩れ等により亡失したので、萩原や小田原の篤信の人達が雲峰寺の境内に運んだのである。今、山門の上下の石段の両側と金比羅さんの前の石段の両側に鎮座している。われわれの祖先の信仰を讃えると共に、遺された尊い石仏を大切にしたいものである。

雲峰寺仁王門（塩山市史より）

《百体の観音さんについて、勧進帳の所在を教えてくれた筆者の同級生、長兵衛山荘の主人雨宮長徳君に感謝と敬意を表したい。》